
ナイトで行こう！

ATURA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナイトで行こう！

【Nコード】

N8075F

【作者名】

ATURA

【あらすじ】

自称ネットゲの神である主人公春時^{はるとき}、ある時自分以外の全ての時間が止まったと思ったら彼は異世界に迷い込んだ。そしてその世界で出会った騎士見習いの美少女二人とヘタレキングの少年と騎士になるため勉強する事になった。事件！戦争！そして恋！春時達の最強武勇伝をぜひとも刮目せよ！

ナイト1「時が止まりやがった」(前書き)

楽しく面白くかつこよく！を目指して書いていきます！よろしくお
願いします！

ナイト1「時が止まりやがった」

騎士、それは日本でいう武士。^{あるし}

主に忠誠を誓い、守りたいものを護る戦士。

己の力と技術と精神をかけて敵を倒す者達。

中世のヨーロッパに多く存在していた。

「・・・このキャラ使えねえな」

そう言ったのは、自称ネットゲーの神、水戸^{みと}春時^{はるとき}、高校2年。

幼少の頃よりネットゲームに熱中、プレステやwiiには一切興味を示さないでネットゲームに熱中したためキャラ育成型RPGでは既に213レベル、クリアミッション数はネット内でブツちぎりの一位、新記録も今だなお更新中というネットゲーオタクである。

彼は今新しいネットオンラインRPGゲームの『神の新世界』をプレイしていた。

「パワーとスキルが偏っておらず、尚且つ速い攻撃とコントロールのよさで選んだつもりだが・・・この騎士は失敗だな」

そう言つて春時はメニュー画面を出してキャラを削除した。

「やっぱ近距離キャラは俺には合わんな・・・やはり俺の最も得意なキャラで行くしかないかな、頼んだぜ！魔女っ娘！！」

春時はそう言つてキャラクター作成で魔法使いを選んだ。

「遠距離からの攻撃は最も安全であり！弓矢や銃なんかとは比べ物にならない攻撃力！更に特殊スキルとして瞬間移動！透明化！防御力や速さなどを上げるステータスアップ！！そして回復魔法があれば無敵同然！！しかも剣を振り回す野蛮な女の子キャラより断然！かわいくて！可憐で！清楚なのだああ！！」

「うつせんだよバカ兄貴があああああ！！！！」

隣で勉強をしていた小学生5年生の弟にPCを蹴られた。

「だあああ！！！！パソコンがフリーズだと！？蘇れマイマジシャン
ガール！！」

「いつそのこと貴様が二度と目覚めれないように葬ってやろうか？
兄貴？」

かわいい顔して殺意剥き出しの弟に、春時は笑顔で謝罪した。

「ああゝあ、今回のゲームはかなりかわいいキャラクターだったから
ぜひとムクリアしたかったのに」

「兄貴はネットゲ以外にする事は無いのか？」

「俺にネットゲ以外何ができると？」

「心臓を止めて倒れている事」

「死んでいるよね？確実に死んでいるよね？」

弟の毒舌で気分が下がった春時は外出をする事にした。

「母さんは6時に帰って来るんだよね？それまでには帰るよ」

「いつてらっしゃい、お菓子買ってきてね」

弟の頼みに返事をして、春時は玄関のドアを開けて外へ出た。

外は寒い、そりゃ冬なのだから寒い。

北風が体にぶつかるのを感じながら、春時は道を歩いていた。

ネットゲーム以外にする事かあ、ないな

勉強だつて落ちこぼれ寸前であり、

スポーツでは力のできるものは得意だがスピードもセンスもないの
でプロレスごっこでしか目立たない。

他に得意な事があるわけでもない、超能力があるわけでもない、魔
法が使えるわけでもない。

「・・・やっぱ俺にはネットゲしかないな、うん」

彼は自分にそう思いこませて納得する事にした。

コンビニに入る。

適当なお菓子と飲み物を手に取り、レジへ行く。

店員はアルバイトの若い女性、笑顔で会計をする。

「560円になります」

「あ、はい」

彼は財布を取り出し、千円札と五十円玉を出した、後は十円玉だけ。他の客はまだ後ろに並んでいない、彼は別段慌てることなく十円を出そうとしたが、たった一枚の十円玉が見つからない。

「ちっ、ないか・・・百円玉に変えよう」

彼はそう思い、百円玉を手に取った。

しかし、誤って手から滑り落ちる。

「だあ!・・・ちよつとすいません」

彼はそう言つて下に落ちた百円玉を拾うためかんだ。すると今度は手に持っていた財布を逆さにしてしまい、小銭がどんどん落ちる。

「あわわ・・・ツイてないなあ」

春時がようやく小銭を全部拾つて立ち上がる。

「すみません、だいぶ時間がかっちゃいましたね」

照れ隠しにそう言つが、店員からの返事はない。

「・・・あれ？」

目の前に店員を見る、笑顔でじつと立っている。

「・・・あの？」

早くしないとお客さんが並んじゃうだろ？

そう思つた春時、つい気になって後ろを振り返る。

「・・・え？」

お菓子の棚で突つ立ったままの女子高生。

おにぎりを手に持って振り返ろうとしている所で止まっているサラリーマン。

極めつけは中学生ほどの少女がこのコンビニへ入店しようと自動ドアをくぐろうとしていた、だが、体の半分しか入っていない、なのに止まっているのだ。

自動ドアすら動かない始末、その光景に春時は焦り始めた。

「お、おい、どうなっているんだよ？」

春時は震えた声で外に出ようとした。

中学生の女の子は目を開けたまま、真っ直ぐ前を見ていた。
瞬きすらしない、春時はその横を慎重に通って外へ出た。

「・・・風が、吹いてない」

それだけではなかった。

道路で止まることなく動いているはずの車は全て止まっており、人ごみが常に移動し続けている光景は、人がピクリとも動いていない異様な光景になっていた。

「・・・な、なあ、おい！誰かいねえのか！？」

春時は涙目になりながら走った。

家の前に着く。

「な、夏生^{なつき}は、大丈夫だよな？」

弟の名前を言いながら、彼はドアを開けて中に入る。

「夏生！夏生！返事してくれ！」

靴を慌てて脱いで家にかかるなり、彼は階段を駆け上がって二階の自分達の部屋に走った。

「夏生！」

部屋では、弟が相変わらず机に向かって勉強している姿があった。だが、そのシャーペン^{シャーペン}は、動いてなかった。

「夏生！どうしたんだよ！」

弟の肩に手を置く春時、だが夏生は一切動かない。

「・・・嘘^{うそ}だろ？」

春時は恐怖のあまり叫びながらまた外へ出た。

どれくらい走っただろう。

彼は息を切らしながらとぼとぼ歩いていた。

「・・・くそ！どうすりゃいいんだ！？」

自分以外の人間、それどころか機械すら、動いてなかった。つまり、彼以外の時間の流れが止まったのである。

「どうなるんだよ俺・・・このまま、一生一人なのか？」

孤独という名の不安に駆られた彼は、止まることなく歩いていた。

人も、動物も、機械すら動いていない所を見ると、これは俺以外の時間が止まった、と考えるべきだな・・・問題はなぜそんな事が起きたのか、そもそもどうやってこの状態になっているのか、そして・・・どうすればこの状態が解けるのか・・・

春時は歩いていたお陰で少し冷静になったので頭の中を整理していた。

だが起きた出来事があまりにも現実離れしすぎている。

いくら考えてもヒントらしきものすら思い浮かばなかった。

「だああ！！！！無理！考えても解決しねえよ！くそ！誰かいないのかああ！！！！」

彼の叫び声は虚しく響いただけだった。

「・・・寂しいぜ・・・」

春時は一人でそう呟いた。

ふと、何かを感じた。

何を感じたといわれると、悪い予感がしたと言えない、そんな何かを感じた春時。

彼は何気なく後ろを振り返る。

すると、特に眩しくない光の球体を見つけた。

「・・・な、なんだ？」

彼がそう言うと、光の球体はどんどん大きくなっていった。

「なんだ？どんどん大きく・・・違う！近づいてきているんだ！？」

春時は危険を感じて後ずさりをする、だが、光の球体は止まること

なく近づいてきた。

「やべ！飲み込まれる！？」

球体が足に触れた、痛みなどはしない、だが足の光に入っている部分の感覚が無くなっていた、どんどん光は春時を飲み込んでいく、そして、とうとう全てを飲み込んだ。

次の瞬間、春時が消えて光も消えた。

動いてなかった時間が、動き出した。

人々が動き出した、機械も動き出した。

全員が、まさか止まっていたなどという事に気付いていない。

そして、誰も春時の事を、覚えていなかった。

彼の存在は消えた。

ナイト1「時が止まりやがった」(後書き)

ぜひとも！感想評価待ってます！

ナイト2「異世界に来ちゃった」

春時が目を覚ます。

体に痛みはない、だるくもない、そう、まるで何事もなく朝いつも通り起きるあの時のように、春時は起きた。

「あ、あれ？俺確か光にのまれて・・・」

彼が上体を起こして周りを見渡すと、目の前には大木が並んでいた。一応光は差し込んでくるが、少し薄暗い。

「・・・不気味な所だなオイ、誰かいないのか？」

春時が立ち上がってそう呟いたが、答えてくれるものはなかった。代わりに鳥の鳴き声が聞こえた。

「へっ、答えてくれるのは優しい鳥君だけかよ・・・って！鳥の声！？」

春時はどう見ても別世界に飛んでしまった事より、時間が動いている事に感動したようだ。

「動いてる！動いてるよ！！これなら人もいるはずだろ！！うん！絶対にいる！！」

春時はまた元気よく走り出した。

走っていると、所々に動物がいる。

派手な色のした鳥、イノシシ、そして見た事のない丸い毛玉のような生物。

「すごい！みんな動いている！！みんな動いているぞおお！！！！めちやくちや着眼点がずれていた。

そんな事も御構い無しに春時は走り続けていた。

ふと、春時は前方に何かを見つける。

それは、見まごう事なき人だった。横たわってはいるが動いている。「や、やったああー！！！！！！人がいるぞおおー！！！！！！」

もう有頂天になり春時は何も考えず倒れている人のそばに駆け寄った。

「人だ！人ですよね！？あなた動いている人ですよね！！」

「え？」

女の子だ、歳は恐らく同い年、黒い長髪がきれいでかわいい顔立ちをしている。

「喋ってる！やっぱ動いている人なんだ！」

「え？あの？」

「君に会えてよかった！君が天使に見えるよ！！」

「ちょ、あの？え？」

既に何を言っているのかわからないが、とにかく春時は喜んだ。

「いや、よかったよかった！」

「・・・あ、あの、えっと・・・その」

しどろもどろしている女の子、春時もようやく正常な感覚になる。

「・・・ここ、どこ？」

気付くのが遅すぎる。

「えっと・・・なんかすみません、俺だけで盛り上がりちゃいました」

「い、いえ！大丈夫です！」

変なフオローをする少女、だが、春時は少女を見て驚く。

白い生地服に血がにじんでいる箇所がある。

右手には鋭い剣が握られていたが、その右腕の肩からも出血していた。

「き、君大丈夫！？ケガしているよ！？」

「あ、その事なんですが・・・あの人たちにやられて」

少女が目で相手をさす、丁度春時の後ろにいるようなので春時は振り返る。

すると棍棒を持った大の男三人がこっちを見ていた。

「・・・えっと、あちらの方達はどなたですか？」

「盗賊さんです、奇襲かけられちゃいまして見事やられました」
照れ笑いをする少女、だがそんな事をしている場合ではない。

「・・・逃げよう、うん、そうしよう」

春時は早速少女を担いで逃げようとする。

「あ！すみません！じつは仲間が囚われてまして！」

「なに！？・・・かわいそうだが、あきらめろ」

春時は非常にも切り捨てた。

「だ！ダメです！私の大切な同級生だから！助けなきゃ！」

「・・・といつてもなあ」

そんな事をのんきに言っていたら、いつの間にか厳つい男三人が二人を囲んでいた。

「・・・あ、あああああですね、オレは通りすがりの乞食でして・
・何も取れるものは」

「え！？まさか逃げる気ですか！？」

「あ、この女の子が欲しいなら上げます！というか僕のじゃないですしハイ！」

「ひどい！私の事会えて良かったとか！天使だとか言ってたじゃないですか！！」

「うるさい、大人しくついて来い」

大男がそう言うと、春時はものすごい勢いで首を縦に振った。

「・・・かつこ悪いですねあなた」

「う、うるさい、オレは一般人だぞ？戦えるわけないだろ！」

二人は拘束されながら盗賊に連れて行かれた。

森の奥へ進んでいく。

すると、いかにも盗賊のアジトのような洞窟が見えてきた。

案の定、その大きな穴の中へ連れて行かれる二人。

「どうやら盗賊のアジトみたいだな」

「そうですね、ミーファもいるといいんだけど」

「ミーファ？」

「同級生の名前です」

二人がそんな会話をしている間にも、どんどん奥へ進んでいく盗賊。そして、小さな明かりの漏れる穴を越えると、そこはかなり広い空洞になっていた。

「おい、また二人ほど奴隷になりそうなガキを捕まえたぜ」

「本当か？よくやったな、その牢屋に入れておけ」

むさくるしい男ばかりのアジトは嫌悪感で見るとも嫌になった。だが牢屋とやらはその男ばかりの場所から十分よく見える場所にあった。

「オラ！入つてろ！」

鉄格子が開いた瞬間、中へ強引に突き飛ばされた。

お陰で春時は顔面を地面にぶつけ、少女はお尻を地面にぶつけた。

「いでえええ！！！」

「いたゝい！」

二人で仲良く痛みにもだえている所に、割ってはいる者がいた。

「シエナ！何で戻ってきたの！？」

また女の子の声がする。

「え、えつと・・・まだドジしちゃって・・・エヘヘ」

情けない返答をする少女、そして溜め息をするもう一人の少女。

「全く・・・まさかシエナ、その人を巻き込んだんじゃないでしょうね？」

そう言つて少女は春時を指差した。

「え、えつと・・・なんかいきなり出てきて、一緒に捕まっちゃった」

「バカ！一般人を逃がさないでどうするのよ！それでも見習い騎士

「!?」

「う、ごめん」

「本当に！私がわざわざ逃がしたのに！あっさり捕まった上に無関係な人巻き込むなんて！」

「ほ、本当、ごめん」

しゅんとする少女、それを見て春時は助け舟を出す。

「いや、悪いのは俺だよ、状況もよく見ないで軽はずみな行動をしたから、まあまさか盗賊がいるとは思わなかったが・・・それに、あんたの事をすっごく心配していたし、そこまで悪い事はしてないよこの子は」

春時がそう言うのと少女は涙目になる。

「あ、ありがとうございます」

「い、いや、いいつて、お礼を言われるほどじゃあ」

「で？あんた誰？」

そう言つて、もう一人の少女が春時と目を合わせる。

その少女は銀髪のショートカットで瞳の色が金色で綺麗な目だった。

「俺の名前は水戸^{みと}春時^{はるとき}、17歳だ」

「ミト？ハルトキ？変わった名前ね？」

銀髪の少女が浮かない顔でそう言った。

「私はミーファ・クロア、見習い騎士でセイント・スター学園の生徒」

「わ、私はシエアナイロアット・アルファンダ、シエナと呼んでください。ミーファと同じ見習い騎士で^{セイントスター}S・S学園の生徒です」

一応自己紹介がすんだ所で、ミーファが聞いてきた。

「あなたは何の職業をしているの？」

「え?・・・高校生です」

「なにそれ?・・・何しているところなの？」

「べ、勉強を」

「だから何を？」

「が、学問というべきかな？」

「ああ、あなた見習い賢者なの？」

「いや・・・賢者ほど勉強はしてないっすよ」

「じゃあなに？」

「・・・一般人です」

「町民？」

「うん、そうそう」

「農民？商人？地主？役人？どれよ？」

「・・・どれでしょう？」

そう言つと、ミーファはものすごい怪しい目で春時を見た。

「なに？あんた頭おかしいの？」

「失礼にも程があるだろ？・・・まあ、話を聞いてくれ」

春時は簡単に異世界から来た事を話した。

「どうだ？信じてくれるか？」

「いや、全然」

見事春時は撃沈した。

「な、なんだよ、少しは信じてくれよ」

「異世界から来ましたって言つて誰がすぐに信じるのよ」

「そ、そりゃそうだが」

「・・・で、でも、魔法使いがそういうことをしたのかもしれないよ？」

シエナがそう言つと、春時は驚いた声を上げる。

「魔法使いがいるのか？・・・ハァ、騎士に魔法使いに賢者とか・・・もはやゲームの世界だな」

「はあ？ゲーム？冗談じゃない、これは現実よ！・・・全く、シエナは本当厄介ごとを持つてくるのだけは抜かりないわねえ」

「オレは厄介ごとかよ」

「・・・それより、脱出の方法を考えようよあ」

シエナの最もな意見に二人は従つた。

「問題は敵の多さね、私は大体10人くらいなら倒せるけど、二人を護りながらだと上手く戦えないわ」

「なんだよ、見習いでも騎士なんだろう？こんな盗賊達パッとやつつけちゃってくれよ」

「一人も倒せないシエナはどうなのよ？」

春時は黙ってシエナを見ない様にした。

「え？何で見てくれないの？春時君？」

「とにかく・・・あんたはどうなの？春時、意外と強かったりして既に二人が馴れ馴れしく名前で呼んでいたが、春時はかわいい女の子という理由であっさり許した。

「オレの力か？・・・残念だが期待に応えられるほど強くはない、たぶんこの鉄格子を殴ったらオレの手が碎け散ると思う」

そう言いながらおもしろ半分春時は鉄格子に拳をぶつけた。

「バツコン！！」

鉄格子が思いつきり外れる。

しかも春時が殴った箇所の鉄が曲がっていた。そのうえ、春時には全く痛みがない。

「・・・あ、あれ？」

慌てる春時であった。

ナイト3「強くなつてやがる」

今まで腕相撲で負けた覚えはなかった。

だが、腕力があつても野球が上手いわけではなかった。

キックでバットを三本連続でへし折る事ができた。

だが、サッカーボールを蹴れば案の定全て場外へ飛んで行きオレはサッカー禁止令を出された。

オレは、運動をする上での技術やセンスといった物は持ち合わせていなかった。

だが、腕力だけは日々進歩していた。

だからと言つて鉄製の格子をいとも簡単に破壊できるほどの化け物級の腕力ではなかったはずだ。

春時は今だ啞然としていた。

ミーファも口を開けて突つ立っている。

ただ、シエナだけは特に驚かず、尊敬の眼差しで真剣に春時を見つめていた。

「すごいです春時君！」

「これ・・・すごいなんてものじゃないでしょ？」

二人が感想を口に出しているが、春時はそれすら聞こえないようだ。

「・・・こんな芸当ができるなんて・・・あなた実は闘士でしょ？」

もしくは魔法使い？」

「・・・い、一般人のはずだけだな？」

そんな台詞が所詮苦しい言い訳であることなど春時は先刻承知だった。

しかしそれ以外に言える台詞がなかったのだから仕方がないだろう。

「・・・とりあえず脱出口は確保したぜ」

「いや、どう考えても大きな音を立てたんだから敵にばれているで

しょ？」

ミーファがそう言つて盗賊どもがたむろつていた場所を指差した。だが、そこにいた男達は血気盛んな盗賊ではなく、真青な顔をして固まっているおっさん達だった。

「……あれ？どうしたんだ？」

春時が動かない盗賊たちを見て一歩前に出る。

『うわああああ！！！』

とたんに盗賊たちが奇声を上げて出口へ走り出した。

中には”化け物だ”などと叫びながら逃げていく奴もいる。

確かに、突如鉄格子を素手で破った人間と対面すれば、おのずとそうなるだろう。

「なんだよ……意外と肝の小せえやつらだな」

ここぞとばかりに春時は得意げな表情でガッツポーズをした。

この怪力……恐らく異次元に飛ばされたもんだからその際に特殊変化でも起きたんだろ、でなきゃこんな化け物じみた力手に入れるわけないからな……これはラッキーだな、この力さえあればうまくこの世界でも生きていけるだろ！

今までに手にしたことのない巨大な力を手にした春時はつい図に乗ってしまった。

「まあ、今のオレの力を見ればわかつてくれると思うが、オレは異世界から来た人間なんだよ、今度こそ信じてくれるか？」

「全然」

「えっと……し、信じますよ？」

二人の顔は露骨に信じていないという顔だった。

「……おいおい、いいかあ？オレは鉄格子どころか岩だって粉砕できるんだぞ？」

やった事もないくせに自慢げにそう言った春時は岩の壁に拳を叩き
いれた。

「バキヤア!!」

見事に春時の拳が粉碎された。

「だおぎゃあああああ!!!」

転げ回る春時。しかも岩の壁は傷一つついていない。

「う!うそだろ!?オレは異世界を移動中に超人化したはずなんだ
ろ!?なんで!？」

真剣な顔をしてそう言った春時、それを見ていた二人は顔を真っ赤
にして震えていた。

「・・・な、なんだ?どうした?」

春時が声をかけると、二人は一瞬顔を背けたが。

「アハハハハハ!お、おもしろすぎるわよ春時!なに?あなた道化
師だったりして?」

「わ、笑いすぎだよミーファ、プツ・・・フッフ」

「シェナだつて笑っているじゃない、ハハハハハ」

盛大に笑う二人、涙まで流して笑っている。

「ヒーヒー、あゝ!お腹痛い・・・ふう、笑いすぎたわね」

「ハ、ハハ・・・ハア、ハア、こんなに笑ったの・・・久しぶり」

「さてと、落ち着いた所でお二人さん、一発殴らせて?」

春時が怖い顔をしながら拳を握っていた。

「ご、ごめんなさい、ただ、本当に面白くて」

「シェナちゃん?フォローのつもり?それともけなしてますか?」

春時が素早くデコピンをシェナの額にした。

「アウ!?!?!? いったい」

「さて、次はミーファ、貴公だ」

「い、いやよ! 悪かったから! 謝るからホラ!」

「問・答・無・用」

『ペシッ』

「いたっ!?!?!? く、女の子に手を上げるなんて」

「男女平等派なんぞね」

とりあえず危機を脱した三人。

「で?!?!? これからどうする?」

洞窟を抜けてようやく陽の光をあびる。

春時は遠くを見ながら二人に聞いた。

「え?!?!? 私達は学園に戻るけど?!?!? 春時は?」

ミーファがそう聞いてくるが、もちろん春時にあてがあるわけがない。

「?!?!? 旅人にでもなるか」

「え、危ないですよ? 今は悪魔や魔物がうようよしてますから」
シエナの一言で固まる春時。

くっそ、さっきの力がいつでも出せるんなら旅人にでもなれるんだが?!?!? いやまてよ、この世界は俺の世界とは違う職業がたくさんあるんだよね? だったら簡単に手軽な職業があるんじゃないかねえか?!?!? よし

「なあなあ、手っ取り早くなれて、金も稼げて、超安全な職業ある?」

「ない」

ミーファが間髪を入れずに言い放った。

「?!?!? じゃあ、簡単になれる職業でいいや」

「どこの学園を出ているかによって変わるわよ? あなたどこの学園出身?」

「?!?!? 高校在学中でした」

「コウコウ？なにそれ？どこの学園？」

「だめだ、こいつ会話ができねえ」

春時はタコ殴りにされた。

「あんたのほうがよっぽど頭おかしいわよ！折角こつちが親身になつてあげてるのに！」

「だから！オレは異世界から来たんだヨ！信じろや！」

二人が言い争っている、シエナが心配そうな顔で仲裁に入った。

「言い争っても意味ないよ、とにかく、私とミーファは学園に戻らないといけないし、春時君にも帰る場所があるんじゃないんですか？」

シエナはそう言うが、もちろん春時に帰る場所などあるはずがなかった。

つつても、こいつらは学園の生徒らしいし、何とかしてくれるわけがないよな」

「つーか本当に異世界から来た事は信じてくれないんだな？」

「あう！・・・そ、それは・・・」

「もういいでしょ？おふざけに付き合う程暇じゃないのよ！」

二人はこれっぽっちも信じていないようだ、春時も諦める事にした。

「ま、やっぱ信じろって言うのも無理だよな・・・とりあえず、街はどこ？」

「はあ？街の場所も知らないの？」

「それぐらい早く教えてくれてもいいんじゃないかねえ？」

春時が悲しい目でミーファを見た。

「わかったわよ、街はここから真っ直ぐ東に進んで行けば着くから、学園はその途中だけだね」

「ふーん、ま、一応世話になったし、ありがとうな」

春時がそう言うと、シエナが気付いたように言った。

「あ・・・あ、ありがとう！」

真剣にそう言うシエナの顔は、少し赤い。

「助けてもらったのに、ちゃんとお礼言ってませんでしたね」
照れ隠しに笑うシエナに、春時は自然と笑みになった。

「ま、私も一応言つとくか・・・ありがとうね」

「いやゝ、もうシエナのお礼だけで十分だよ」

春時はやはり殴られた。

「二度と現れんな!!」

ミーファがそう叫ぶ、春時はそんなミーファを見ながら笑った。

「じゃあな」

そこで春時は二人と別れた、しかし、この後また対面する事になる
とは、三人は今はまだ、思つてすらなかった。

たどり着いた街

レンガ造りの街、おそらく中世のヨーロッパの建物を思い浮かべると
ぴったり当てはまる風景だ。道行く人はやはりヨーロッパ人のよ
うな白人が多い。

「にしても・・・こんな所で日本語が通じるって言うのも不思議だ
な」

春時がそんな事を言っていると、後ろから何かの衝撃を感じた。

丁度小さい何かがぶつかってきた感触、振り返ってみると、案の定
小さな子供がズボンを掴んでいた。

ギリギリ小学生だろうか？にしても青い目が印象的な女の子だ。

「どうしたんだい？」

「・・・しゃべれる」

小さな女の子はそれだけを言つて、指で付いて来て欲しいとジェス
チャーした。

「ん？ん？・・・えゝつと、迷子かい？」

「・・・いいから、こつち」

少女のするがままに、春時は連れて行かれる。

すると、少女が連れてきたのは、看板が剣と盾が描かれている武器屋だった。

「・・・え？」

「・・・お願い」

春時は困った表情をするしかなかった。

ナイト3「強くなつてやがる」(後書き)

ようやく一区切りです。

ナイト4「けなげな少女だと」(前書き)

うん、アクションはまだまだかな？

ナイト4「けなげな少女だと」

「あのー、ごめんね、お兄ちゃんお金持ってないから」

春時は少女に優しく説き伏せる、だが少女はキョトンとしているばかりで手は放さない。

「うーんと、えーだから・・・」

「・・・聖語せいご話せる・・・それに・・・東洋人・・・桜語おうご話せる・・・でしょ？」

「セイゴ？オウゴ？・・・話せる？・・・東洋人？」

春時はそこでしょうやく少女の言いたい事がわかった気がした。

「つまり・・・お兄ちゃんが東洋人だから、桜語がわかると？」

「・・・うん」

少女はパツと笑顔を咲かせて頷いた。

うーん・・・どうかなー？・・・でも、オレと同じ東洋人っていうのは気になるな・・・

春時は考えているが、少女はかまわず店に春時を連れて入った。

店内は結構広い、そして甲冑や槍、そして剣と盾が所狭しと置かれている。

どれも手入れは行き届いているのか輝いて見える。

そんな品物だらけの場所の入って右奥に、店主らしき男性と着物の着た男が話し合っていた。

レジ越しに話し合う二人、だが、どうも会話がアッていないようだ。「すまんが何を言っているのかわからん、買いたいものがあるのか？」

「オレは道を尋ねているのだ、道だ道、セイントスター学園への道を教えてくれ」

見事に合っていない会話、だが春時にはどちらも日本語に聞こえる。

おいおい・・・なんちゅう会話をしてるんだよ・・・

「・・・お父さん・・・言葉のわかる人・・・見つけた」

少女が店主の男性にそう言った、すると、立派な髭がトレードマークの銀髪の店主が春時を見た。

「おお！さすがだミナ！これで会話ができる！」

店主の男性は春時にむかつて手招きをする。

「すまんな、ちよつと通訳を頼む」

「え、ああ、はい」

春時は呼ばれるがままに店主と着物の男に近寄った。

「で、このお客さんの言っている事なんだが」

「言葉の通じる者か？道を尋ねていると言ってくれ」

二人が一度に喋ってくるが、春時の耳にはどちらも日本語に聞こえるので特に問題はない。

「えつと・・・道を尋ねていますね、この人」

「道か、いや、こりゃ早とちりしたな、で？どこへ向かうと？」

「・・・どこへ行くんですか？」

春時は着物を着た男の目を見て聞いた。

「うむ、セイントスター学園、あの騎士育成ではトップの学校だ」

「・・・セイントスター学園だそうです」

春時は半ば馬鹿馬鹿しくも店主にそう言った。

「セイントスター学園か！さてはこのサムライさんは新任の先生かい？」

店主がそう聞くので、春時も同じ台詞を着物の男に言った。

「うむ、そうだ」

「・・・そうですって」

「おお！これはこれは、先生を足止めしちまったな、いや、本当にすまなかったな」

「えつと・・・足止めして申し訳ない、と」

「いえ、急ぎではなかったので大丈夫だ」

「・・・大丈夫だから心配には及びません、と」

「そうですか、じゃあ、ちよつと地図を描きますから」

そう言つて店主は地図を書き始めた。

そして地図を手渡し、話はついた。

「かたじけない、そなたも、手助けありがとう、では」

着物の男はそう言つて頭を下げ、店を出て行つた。

「・・・ありがとう、だそうです」

「そうか、いや、助かつたよ兄ちゃん、まさか異国語で話しかけられるとは思わなかつたからさ」

「はあ、そうですか」

「・・・そういや、見ない顔だね？もしかして旅人？」

「・・・いや、そういうわけじゃないんですけど・・・」

うーん、ここで異世界から来たなんて言つても信じてもらえないなあ・・・

春時が困っている顔をしているが、かまわず店主は話を続ける。

「でも東洋人だろ？桜語もわかるみたいだし間違いないよな？でも聖語もわかるんだよな？・・・魔法使い？じゃあないわな、魔力がないようだし、ってことは勉強したのか？この二ヶ国語をマスターするなんて、兄ちゃんもしかして賢者？」

よく喋る店主に圧倒される春時、どうやら言い訳を考える暇もないようだ。

「で？結局何者だい？」

「・・・えっと・・・信じてもらえろといいんですけど・・・」

春時は記憶喪失のフリをする事にした。

「気がついたら・・・なんか森にいて・・・そこで運良く人と会つて、まあこの街まで来たんですけど、途方に暮れていたら、その子に・・・」

春時はそう言つてミナと呼ばれていたあの少女に目を向けた。

「・・・あんた・・・さては魔物に襲われたのか！」

店主は先程とは違う表情で春時を見ていた。

「え？えっと・・・そうなのかな？魔物一回も見てませんが・・・」
「いや！間違いねえ、あんた魔物にやられたんだよ、それで記憶が・

「ハア、かわいそうに・・・不憫だよ」

「いや、はあ、ありがとうございます」

「・・・実はよ・・・ミナの、両親も・・・魔物にやられたんだよ」

「・・・え？」

「・・・悪魔のペットだったそうだが、ミナは一年前、家族をその悪魔に襲われたのさ、お父さんが一流の騎士だったからな・・・悪魔共からも恐れられていた騎士だったんだ、オレも、あいつの為によく剣を打ったものさ・・・だが、あの夜、悲劇は突然起きた・・・悪魔共がミナを人質に、ミナの両親を脅したんだ・・・だが、ミナの父さんも一流の騎士だ、悪魔と戦う術は心得ている・・・それで、自分の命を身代わりに、ミナを取り返し、見事助けた、だが・・・翌朝、倒された魔物の死体と、父親と母親、そして姉の死体の中で、ミナだけが泣いていた」

春時は頭の中が真っ白になっていく感じを、リアルに体感していた。何も考えれない状態、だけど、その惨劇だけは、頭の中で映像となつた。

「・・・こいつは、俺が引き取る事にした・・・もちろん、今のように話せるようになったのはホンの3ヶ月ほど前からだ・・・それまでは、本当に一部の人のしか、言葉を交わさなかった・・・そんな、こいつが・・・見ず知らずのあんたに声をかけたんだ・・・あんたを、信用している部分があるからか、それとも、同じ感じを受けたのか、それはわからないが・・・これも何かの偶然だ・・・行く所がないのなら、ここにいたい」

店主の男は、優しい笑みでそう言った。

「・・・あ、ありがとう・・・ごじます」

春時は、なぜか涙を流していた。

悲しみの分、ミナの辛い過去を聞いて、悲しんだのか。

心配の分、全くの異世界で、元の世界に帰れるのかどうかもわからない、不安からなのか。

安心の分、快く、受け入れてくれた、ミナと店主の気持ち、嬉しいからか。

どれかは、わからないが、その涙は、暖かった。

「ちょ！・・・父さん！？なに女の子泣かしてるの！？」

ふと、そんな声がしたと思ったら、かわいい顔をした少年がいつの間にか現れて、春時を見ていた。

・・・って、は？

初めて女の子に間違えられた瞬間だった。

ナイト4「けなげな少女だと」(後書き)

そついやもうすぐ一年も終わるな、あと何時間だろ？

見事にどうでもいいことを口走っている作者でした。

ナイト5「クロだつてさ」

「クロコダイル・ゼフ・ダミリオン……です」

短い金髪で、肌が雪のように白いその少年はそう名乗った。

「い、いや、女の子じゃなかったんだ……ごめんなさい」

「い、いや、いいさ、まあ……よろしく」

「うん、春時くんかあ、東洋人なんだね」

「まあ……そうだな」

春時はクロコダイルに案内されながら母屋に入っていった。

「父さんしゃべり好きだから大変だったでしょ？」

「いや、そんな事ないさ」

「そつか……そういえば魔物に襲われたんでしょう？」

「うん……まあ、記憶はないけどな」

「そ、そつか……えっと、その……うん……ここは、いいところだから、大丈夫だよ」

「ああ、ありがとな」

かなりおどおどしているが、春時はクロコダイルは良いやつだと思っていた。

しかし、魔物に襲われたわけではないので結構良心は傷ついていた。はあ、にしても……住むところはこれで良いが……後はどうすつかな？

「あ、あのさ！春時くん！」

いきなりクロコダイルが突然声を出した。

「え？どうした？」

「……剣術……って、得意？……だよな！」

いや……全然

「だって！東洋人だもんね！サムライなんだよね！剣術はサムライが一番だって学校でも教わったし！」

おいおい・・・ここではどんな教育がなされているんだよ？

「お願い！春時くん！・・・今度昇級試験があるんだ・・・相手は親が一流ハンターで有名なクロアさんっていつてさ、槍を使うのがすごく上手なんだ・・・ていうか同年代の子では絶対かなわないよな子なんだ・・・それでも・・・それでも僕！騎士を目指しているんだ！絶対に！絶対に騎士にならなくちゃだめなんだ！・・・お願い！力を貸して！」

懇願するクロコダイル、だが、春時が手伝えるようなことはなかった。

「・・・わ、わるい、俺、剣術は知らないんだ・・・」

「あ・・・ごめん、記憶喪失だったよね・・・あ、あはは、僕何言ってるんだか」

「・・・だが、クロコダイル！・・・お前が、強くなりたいっていう意思是、わかった！」

春時はそう言つてクロコダイルの目を見て言った。

「俺自身は剣術を使えねえ！だが！剣術の大まかな動きは知っている！・・・ちよつとした手助けにしかなんねえが、それでもいいか？」

「・・・あ、ありがとうございます！」

二人は堅い握手をした。

「ここは一応在庫置き場なんだけど、最近は戦いが多いからさ、道具も飛ぶように売れてさ、まあ、あんまり喜ばしいことじゃないけどね」

クロコダイルは悲しそうな目をしてそう言う。

春時は少し気になり質問をした。

「なあ・・・もしかして、今戦争でもおきているのか？」

「・・・いや、戦争は一応ないんだけど・・・魔物がよく現れるようになったんだよ」

春時はそう言われても納得はできなかった。

そもそも魔物だの悪魔などといわれても、見たことがないのだからそりゃピンとこない。春時は思い切って聞くことにした。

「なあ・・・その、俺記憶があやふやだからさ・・・魔物って、どんな感じだっけ？」

「・・・え？・・・えつと・・・そうだなあ、理性のない殺戮兵器、って感じだね」

あれ？なんか思ってたのと違う

「人型みたいなものから怪物のようなものまで、いろいろあるんだけどその全てに共通するのが人を見境なく襲って破壊行動に走るところなんだ、そして、それを操っているのが・・・悪魔なんだ」

「・・・その悪魔についても、詳しく」

「うん・・・悪魔っていうのは、人でなくなつた者の事なんだ・・・魔物を召還して人々が襲われる所を見て喜んでいる・・・時には自ら人々を襲うときもあるんだ、悪魔自身も強くて、人の持つていない特殊能力を持つているんだ・・・彼らに共通することは灰色の服装、時には異国の民族衣装だったり紳士服だったり、後・・・春時くんの今着ている服とも似ている悪魔がいたと思うよ」

そう言われて春時は面食らった。

今自分が着ている服は緑のパーカーにジーンズ、それとよく似たということは、もしかすると自分と同じ、異世界から来た人なのかもしれない。

「・・・でも、悪魔なんだよな？」

「うん・・・はつきり言つて、悪魔は最低なやつらだよ」

それはわかつている、春時も店主から話しは聞いたのだ、今更悪魔がもしかすると自分と同じ人間かもしれないとは思つても、だからといって会いたい気などこれっぽっちもない。

「・・・それで？・・・魔物が増えているって事は」

「・・・悪魔が、増えているんだろうね」

クロコダイルは悲しそうに言った。

「そうなのか・・・」

「でも！・・・そんなやつらに対抗するために、騎士見習いである僕らがいるんだ」

クロコダイルは誇らしそうに言った。

「悪魔に対抗しているのは何も騎士だけじゃない、魔法使いも、賢者も、闘士もハンターだって、悪魔や魔物から一般人を守る人々はたくさんいるんだ、そして、僕もその一員になりたい！」

そう言つて、軽くはにかんだ。

・・・そうか、そういう世界観なんだな・・・

「なあ・・・俺ももしかして・・・その、騎士見習いとかになれるのか？」

春時は興味本気で聞いた、しかし、クロコダイルは少しまずそうな顔をしてつまる。

「・・・えっと・・・そうだ！春時くんは剣術が使えるんだよね！」

「いや、だから俺自身は使えないんだって」

「うつ・・・えっと、え・・・あ！そうだ！聖語も桜語も使えるんだから頭いいのかな！？きっと賢者に！」

「おいおい、俺はさっきまで魔物すら知らなかったんだぞ？記憶喪失者に勉強はちよつとな」

「・・・ご、ごめん、だしたら・・・そういった職業には向いてないよ・・・」

「ふゝん・・・ま、それもそうか」

春時はそう言つて納得した。

誰もかれもなれるわけねえわな、そんな魔物とかと戦うのが、楽なわけねえもん

「・・・じゃあさ、俺って明日から普通の学校にでも行くのか？」

「え？普通の学校って何？何を学ぶところ？」

「え・・・だから、高校とか中学とかさ」

「なにそれ？」

・・・そうか、ここではそんなものないんだな・・・ってこと

は学校とかはどちらかという特別な人間の育成機関ってところか・

「い、今はあんまり気にしないでくれ」

「ふーん、いいけど・・・つまり春時くんは明日から仕事がしたいって事だよな？」

「そうそう！そういうことだ」

「だったら通訳士とか翻訳家は？結構重要な仕事だし春時くんなら絶対なれるよ！」

ふむ・・・元の世界では英語が10点しか取れなかったが、この世界では俺は言葉が聖語と桜語がわかるみたいだし、まあできる仕事があるんならそれが一番だな

「そうか、じゃあ、早速明日それをやってみるかな」

「・・・記憶喪失なのに働く意欲があるなんて・・・きつと春時くんは真面目な人なんだよ！」

うん、どうかな？

そう思っていると、先ほどの少女、ミナがドアの前にやってきた。

「・・・ご飯、だよ、クロちゃん、春くん」

「クロちゃん？」

春時が誰のことなのか一瞬わからず声を上げる。

「わああああ！み、ミナちゃん！その呼び名だけは！」

「・・・だめ？」

今にも泣きそうな顔のミナ。

「うつ！・・・いや、うん、いいです」

「ぶっ！・・・はっはははは！！！！そうか！クロコダイルのクロちゃんか！いいなそれ！」

「は、春時くん！」

顔を真っ赤にさせてクロは怒った様子を見せた。

「・・・ほら・・・春くんも・・・ご飯」

「なるほど、俺は春くんか、いいなそれ・・・よし、じゃ、いくか」

三人は笑顔で広間へ向かった。

ナイト5「クロだつてさ」(後書き)

そろそろアクションにはいたいぜ

ナイト6「試合といじつじゃねえか」

翌朝

昨夜は父さんがパーティーだといわんばかりに騒いだので目覚めがいまいちスツキリしなかった二人。ちなみに店主の名前はシルバーなのだが、父さんと呼べと言われたので春時はそれを受け入れることにしていた。

「つたく、父さんはすげえ元気なんだな、母さんも大変だろ？」

「まあ、母さんはなれているでしょ、それにあの人マイペースだしお母さんというのは、その言葉通りの人なのだが、やさしい笑みが印象的なおばさんだった。

「さてと・・・クロちゃんは学校なんだよな？」

「うん、セイントスター学園の四級生徒だからね」

「四級？・・・ってことは、昇級試験で上がると三級生徒になるのか？」

朝ごはんのパンを口にくわえながら春時は聞いた。

今起きているのは二人だけだった、父さんはまだ寝ているし母さんは外で洗濯をしている。ミナもまだ寝ていた。

「そうそう、一級生徒は騎士同然の位で、年齢がくれば自動的に騎士になるんだ、二級生徒も年齢がくれば自動的に騎士になるんだけど、一級生徒よりはもちろん位が低い、三級生徒は小さな依頼をこなせるぐらいの見習い騎士、そして四級生徒は少し慣れた見習い騎士で、五級生徒が新人、それで二十歳になるまでこの学園で勉強するんだ」

「ふーん、ま、クロちゃんはまだまだ見習い騎士って事なんだな」

「あはは・・・そういうことですな」

げんなりするクロ、春時は少し笑いながら謝った。

「わりいわりい、で？・・・俺はどこで通訳士をすればいいんだ？」

「ああ、それなら、学園に来ればいいよ」

「え？・・・なぜ？」

「学園は役所も兼ねているからなんだ、魔物の被害がひどすぎてね、役人の人たちは先生たちに守られながら仕事をするんだ」

「ふーん、大変だな」

「そうだね、でもたいてい役所に用があるときは学園に行けばいい
つてことで簡単といえば簡単なんだけどね」

「というか、通訳士って役人なのか？」

「うん、外交関係とかは役所の仕事だからね」

「おいおい、俺みたいなのやつが役人になれるのかよ？」

「簡単だよ、名前と面接で受かるさ」

「いや、本当に簡単だなオイ」

そんなわけで春時はクロと一緒に学園に行く事となった。

徒歩で学園を目指す二人。

服装はクロがいかにも騎士の様なブーツに青い下地に軽そうな防具、
そして腰には剣。

マントも羽織ってかつこよく決まっている。だが顔はどうもへら
らとして締りがなかった。

春時は毛糸の白い上着に綿のズボンで至って普通の格好だった。

「一応父さんからの推薦状もあるし、春くんは自信を持って通訳す
れば大丈夫だよ」

「そうか、それはよかったぜ・・・お、いよいよ見えてきたな」

春時はそう言って大きな城を見上げた。

塔が確認できるだけで10はありそうだが窓は数え切れないほ
どある。

玄関というよりその大きな門は洋風の中世の城そのもので、鎖のつ
いたあの橋が川の上にどっしりと横たわっていた。

その門をくぐる生徒の数は正直まばらだ、それより一般人のほうが
多いようだ。

「なあ、もしかしてほとんどの生徒は寮生活なのか？」

「うん、そうだよ」

門をくぐって中へ入ると、確かに軽装ではあるが見習い騎士の姿が
たくさん見えた。

「役所の受付はあっちの棟だから、推薦状はあるね？じゃ！がんば
ってね！」

「あ、ああ、クロちゃんもな」

春時とクロはそこで別れることにした。

役所の受付は案外すぐに見つかった。

なにせ一般の人が向かう場所へ行けばよかったのだから簡単だった。
そこで受付をしてもらおうとしたら予想以上に行列していたので春
時はのんびり待つことにした。

白い壁によりながら待っていると、一向に列が進まないことに気づ
いた。

「・・・はあ、いつたいどうしたんだよ？」

春時が痺れを切らして前の人に聞いた。

「すみません、なんで列が進まないんですか？」

すると前に並んでいた男性が快く答えてくれた。

「いやあ、どうやら今受付をしている人が異国人でね、言葉が伝
わらないようなんだよ」

「東洋人なんですか？」

「さあ？・・・そういえば君は東洋人か、なるほど、君なら通訳が
できそうだね」

「ちよつと前に行つてみますね」

春時はそう言つて受付の一番前に向かった。

「す、すみません、今は通訳士もいなくて・・・賢者の先生も魔法
使いもいないんです」

受付をしているらしい女性が必死にそう言っていた。

「ねえ！もう！何言っているのかわっかんないわよ！いいからお父

さんを出して！」

やはり春時にとってではどちらも日本語に聞こえるという奇妙な会話がされていた。

そしてやはり言葉の通じない異邦人はサムライの格好をした少女だった。

「ああもう！誰か言葉の通じる人はいないの！」

「まあ落ち着けて、俺が通訳するから」

春時がわざわざ仲裁に入っていった。

「あ！も、もしかして言葉のできる方ですか！」

受付の女性がほっと安心した表情になる。

「さて、伝えたい事は？」

「あ！あんた言葉が話せるんだね！全く、一時はどうなるかと思っ
たわよ」

少女はそう言つて伝えたい事をしゃべった。

「私はお父さんに会いたいの、この学園の実技教師のシラサギつ
ていうの、そこへ案内してほしいって言つて」

春時はそのまま受付の人にそう言つた。

「そ、そうなんですか、わかりました、でも・・・別に役所へ来る
ほどの用ではないですね」

「やっぱりそうですか・・・」

それを春時はそのまま言つた。

「ええ！ここ役所なの！？・・・し、失礼しました」

春時はその言葉も伝えて話はついた。

「て、手間取らせたわね」

「いいさ、どうせこれからもういった仕事をする予定だからな」

「へえ、通訳士になるの？まあ桜後と聖語がわかるもんね」

少女はそう言つて役所の棟を出ようとしたが、また戻ってきた。

「どうした？」

「そっちこそなんで止まるのよ？」

「いや、俺はこっちに用があるからだよ」

「・・・女の子一人を言葉も通じない所へほっぽり出すんだ・・・へえ」

「素直に付いてきてほしいって言えばかわいいものを」

「う、うるさいわね！」

どっちにしろ受付にはかなり行列ができてはいたし、少しの人助けなら構わないだろうと春時は思い、ついて行ってあげる事にした。

役所と反対方向にある棟に入った二人はとりあえず教師を探すことにした。

「ところで先生は一体どんな感じなんだ？」

「さあ？私の所では威厳のある先生ばかりだからわかりやすかったけど、こんな所初めてだからわからないわ」

「俺もだ」

「あら、あなたも桜花^{おうかく}国から来たのね、いつごろ来たの？」

「あ、いや、実は俺記憶喪失でさ・・・」

春時は簡単に説明をした、それを少女は黙って聞いていた。

「大変なのね・・・そう、魔物に・・・」

「まあ本当かどうかはわかんねえがな」

「・・・そういえば、お名前は？」

「ああ、水戸春時^{ゆきとき}だ」

「私は燈^{ひのくに}乃国雪^{ゆき}、見習い剣士よ」

「へえ、剣士か・・・」

春時が感心して頷くと、雪はうれしそうに頬を赤くした。

「お父さんも剣士？」

「そうよ、今回は特別に学園の実技講師を兼ねて新たな人材育成に励むんだから！」

「はあ・・・俺にとつちや別次元の話だな」

「そんなことないわよ、ねえ春時！あなた私たちのような異国人の専属通訳士にならない！？」

そんなポジションのジョブがあるんだな・・・

「異国人グループの専属サポーターならギャラもいいし、なにより安全よ！四六時中腕の立つ猛者達と一緒になんだから！」

「うーん、でもなあ、俺この街を離れるわけには……」

「そ、そっか……異国人グループはいつも全国を駆け回るものね……ここにいたいなら、仕方ないわね……」

「悪いな、でも、せめて雪がここに居る間だけでも、専属通訳士でいてやるよ」

「本当！ありがとう！」

うれしそうに笑う雪を見て、春時も笑顔になった。

「にしても……お父さんはどこに居るのかねえ？」

「うーん……ばったり会えれば簡単なのに」

二人がどうしようもなく歩いていると、中庭のような広場で、人だかりができていた。

「どうしたのよクロ？また負ければ通算20敗よ？」

「だめですよティナ、そんなこと言ったら彼が惨めでしょう？」

「まあ、どう転んでも惨めだけだな」

春時はそんな台詞を聞いて内心あせる気持ちがした。

……おいおい、クロってもしかして

春時は何も考えず、その人だけに走り寄っていた。

「は、春時！？」

雪もあわてて追いかけてくる。

春時は生徒をかき分けて中央を見た。そこには、やはりクロの姿があった。

服装はボロボロで、所々こげた跡もある。

それでも剣を握って立っているクロ、だがどう見ても立っているのが精一杯なのがわかった。

「ひでえよな、三対一で勝負なんてよ……」

「しかも三人とももうすぐ三級生徒になる実力者だぜ？それに、ク

口だつて一応三級生徒への昇級に一番近い生徒っていつでも、相手が三人じゃなあ・・・」

「噂じゃあ、あの三人、クロに怪我を負わせて昇級させない様にしてるらしいぞ？」

「マジで？・・・まあ、どうせあのティナがそうさせているんだろ？あいついつつもクロいじめてたし」

そんな会話まで聞いてしまった春時に、黙って見ているなどという選択肢はあるわけがなかった。ゆつくりとクロに近づく春時、それに、クロが気づく。

「は！春くん！だめだよ！危ないから！」

クロが必死にそう叫んでいたが、春時は構わずクロに歩み寄った。

「・・・大丈夫かクロ？」

「だ、大丈夫だから、こ、これは練習試合みたいなものだから」
クロがなんとか笑顔をつくって言う。

「おいおい・・・練習試合で大怪我したらどうするんだ？・・・昇級したいんだろ？」

「わ、わかってるよ・・・わかってるけど・・・さ」

下を向いたクロに、春時は何も言わなかった。

「・・・おい、これが練習試合だつていうなら・・・人数的にそっちが卑怯なんじゃねえのか？」

春時がゆつくりと三人にそう言った。

だが、涼しい顔で中央にいる女子生徒は言った。

「いいじゃない？クロが別にいいって言ったんだから」

「じゃあ、俺がクロ側に入っても、問題ねえな」

春時はそう言つて、三人を睨んだ。

「いいわよ？・・・怪我してもいいならね？」

「だ、だめだよ！春くん！これは騎士同士の戦いだから！」

「いゝや、黙っていらねえな・・・友達が傷ついているのを見て

いるだけなんて・・・俺は、男として戦う・・・理由ならそれで十分だろ？」

春時は口だけ笑って、目は鋭く相手を睨んだまま言った。

「全く、一般人が適うわけじゃないじゃないですか、おとなしく引き下がったほうがいいですよ？」

メガネをかけた見るからにして嫌味な男子生徒がそう言う、だが、春時は一切動じない。

「ったく、めんどくせえなあ」

もう一人は背は低いやつだが、運動神経はよさそうな体格だ。

「じゃあ、三対二で、はじめましょうか」

「冗談でしょ？・・・三対三よ」

そう言ったのは、雪だった。

「お、おい、いいのか？」

「あら、相手にも女の子がいるんだから、これでようやく対等よ？」
そう言うて雪は刀にてをかけた」

「・・・じゃあ、試合を・・・始めますか」

三人同士が睨みあい、いよいよ、勝負は始まった。

ナイト6「試合といこうじゃねえか」(後書き)

さあ！いよいよ勝負だ！！
感想評価待ってます！！

ナイト7「負ける気なんてねえよ」

騎士だからといって、持っている武器が必ず剣というわけではないようだ。

その証拠に、女子生徒は剣身が針のように鋭いレイピアで、メガネの男子生徒は小さな短銃、そして背の低い男子生徒は手に手袋のよくなものをつけていた。

春時達のほうは、雪が刀、クロは手持ち剣、そして春時が素手、である。

・・・やべえな・・・これ、どうみても不利だよ・・・

春時は冷静にそう思っていたが、負ける気など、一切なかった。

「ジェン！二人で攻めるわよ！あなたは男のほうを！」

「了解！」

早速、女子生徒の掛け声と共に二人が動く。

「あなた、サムライでしょ？言葉が桜語だし、少しはできるんじゃないかね？」

「・・・笑止、なめてかかると、痛いわよ？」

次の瞬間、雪が走ってくる女子生徒に向かって動いた。

「くっ！！」

女子生徒がレイピアをたてに持った。

次の瞬間、見えない太刀筋が、女子生徒を横切る。

そしてレイピアが宙を舞った。

「・・・あら〜」

「だからいったでしょ？・・・なめてもらっちゃ」

「おやおや・・・あなたはとても強いようですね」

メガネの男子生徒が指でメガネをあげながら言った。

「剣術を極めたものはその攻撃すら風のごとく速く見えないといわ

れていますが、同年代でそんな剣術を見につけた人を見たのは初めてです・・・でも、これはチーム戦、一人だけが強くても、意味はないのですよ？」

そう言つてメガネの男子生徒はクロに向かって引き金を引いた。

「何をごちゃごちゃと、無駄よ！私は弾丸だつてとらえられるんだから！」

そう言つて雪は刀でその弾をはじいた。

「だ！だめだよ！その弾はただの弾じゃないんだ！！」

「え？なに？何か言つた？」

クロの叫び声に驚く雪、だが、次の瞬間、刀が凍っていた。

「極冷弾、触つたものを凍らせる弾です、もう、刀は使えませんね」

「う、うそ？何これ？」

「さあて、後は・・・あいつだけね？」

そう言つて、女子生徒は不敵な笑みで春時の方を見た。

「いつくぜええ！！」

背の低い男子生徒の動きは雪ほどではないがかなり素早かった。

なにより次から次へと殴りかかってくるので春時もよけるので精一杯である。

「うおっ！ぬわっ！ちよっ！あぶねっ！はわっ！」

「なんだあゝ、所詮一般人だなあ？だつたらかつこつけてしゃしゃり出てくんないよ！」

や、やべえ・・・正直あの時の怪力さえあればこんなやつ一瞬なのに・・・でもなあ、あの後岩殴つたけど俺のほうに傷ついたし、くそ！なんかねえか？

そう思っていると、ふと、雪がひざをついている姿が見えた。

やべ、雪もやられたか？・・・！

春時は止まった、なぜなら、クロがあきらめず二人に応戦している所を、見たから。

どう見てもボロボロのクロ、それでも、彼は剣を振りかざし、戦つ

ていた。

自分がいくら傷つこうと、絶対に、倒れることはなかった。それをあざ笑うかのように、二人は容赦ない攻撃を下す。

雪が耐えかねて、やめてと叫んでいる。

「もういいでしょ！？これ以上やったら！」

「・・・だ、大丈夫だよ心配しなくても・・・まだ、戦える」

「でも！あなたボロボロじゃない！本当に大怪我でもしたら！」

「・・・多分・・・もう降参した方がいいって、言っているんだろうけど、僕は、見習いとはいえ、騎士なんだ・・・逃げるなんてこと、したくないんだ」

クロの、強い意思が見えた。

「・・・あいつが逃げたくないって言うてるんだ・・・俺が逃げて、どうすんだよ？」

「なんだ？あきらめて降参か！」

背の低い男子生徒が、拳を振り上げて殴りかかってきた。

「かかってきやがれええ！！」

春時も拳を振り上げて殴りかかった。

二人の拳が、ぶつかり合った。

「！！！！！」

背の低い男子生徒が、違和感を感じていた。

な、なんだ？・・・殴れている感じが？しな・・・い？

次の瞬間、彼は後方へ吹っ飛ばされた、ギャラリーの垣根をゆうに越えて地面に落ちる。

「がはっ！？」

周りが一気に静まり返る。

「う、うそだろ？グローブをつけているジェンに力で勝ちやがった！？」

「っーかどんだけ吹っ飛ばしているんだよ！？ジェン生きているの

か!!」

「お、おい・・・こいつ実は闘士か？だとしたらトップクラスのやつだぞ!？」

静かになったかと思えば、今度はギャラリーが騒ぎ始める。

驚きや興奮が抑えれないといった感じで、ギャラリーが熱を上げる。

「やれやれ・・・とんだ隠し玉ですね」

「やっぱり一般人なわけないわよね・・・勝負挑んでくるんだから」

「・・・え?・・・春くん、そんなに強かったの?」

「・・・え?」

クロと雪は哑然としていたが、二人はもう動き始めていた。

「スール!私が速さでこいつを惑わしとくから!あんたは銃でしっかりあててよ!」

「もちろん、任せてください」

女子生徒が春時と対峙する。

「闘士の弱点はスピードのなさ!どんなに力持ちでも私を捕らえられなかったら意味ないのよ!」

「へ、戯言並べてねえで、さっさとこいよ?」

女子生徒はレイピアで突いてくる。

どんなに力持ちでも・・・一秒に6回突ける私のスピードについて来られるわけないでしょ?なにせ、スピードだけなら一級生徒に値するからあなたなんかじゃ

『ガシッ』

「え?」

春時は二秒でレイピアの動きを見切って、剣先をつかんだ。

「残念、俺は闘士じゃないんでね」

春時はレイピアを片手で粉碎した。

「・・・ええええええ!!!!!!」

女子生徒はパニックに陥る。

「く！闘士じゃないとすれば・・・あなたは何なんでしょうね？」
「さあな」

「・・・いいでしょう、どっちにしろ・・・お強いことに変わりはありません」

「そうか？お前らが弱すぎるんじゃないかねえのか？」

「力と速さであの二人を完封させたんですから、一筋縄じゃあいけませんね」

「・・・」

「あなたほどの強者なら、多少弾も強いのを」

「お前、だらだら喋っているからこの三人の中で一番弱いだろ？」

春時がそう言うのと、メガネの男子生徒の表情が曇った。

「・・・それは間違いだってことを、この弾を受けて解らせてあげますね！」

今度は三回、引き金を引いた。

ひとつは炸裂弾、そして極冷弾、さらに灼熱弾です、この三コノボは痛いですよ

春時にまっすぐ向かってくる弾丸、だが、春時は何の躊躇もなく、拳で叩き潰す。

それは弾ですよ・・・触れば人体に何の影響もないわけがないでしょう？

だが、春時は構わず走り出した。

「な！」

「ほらな、てめえは自信過剰すぎるんだよ、だから、弱い」
そう言つて春時は銃を取り上げて、握りつぶした。

「・・・で、でたらめだ」

メガネの男子生徒は真っ青な顔をして地面にへたり込む。

「・・・え？勝ったの？」

クロがあっけに取られた状態から、ようやく我に返る。

雪はまだ驚いているようだ。

「や、やべえ・・・あいつ何者だよ？」

「く、クロの友達？・・・クロってたしかにいいやつだけど・・・異国人とも仲いいのか？」

ギャラリーが騒がしくなってきた。

「・・・あ、ありがとう春くん・・・えへへ、助けられちゃった」

テレながらそう言つと、いきなりクロは倒れた。

「お、おい！大丈夫か！」

「ご・・・ごめんね、僕がしっかりしてれば・・・」

「・・・おいおい、お前がしっかり戦っていたから、勝てたんだよ・・・自信もてよ、クロちゃんは強い！」

春時は笑いながら、そう言った。すると、クロも笑った。

「さて、医務の先生を呼んでもらうか」

「う、うん、そうだね・・・僕も、限界だし」

「おーい！先生呼んできたぞ！」

ギャラリーの誰かが呼んできてくれたようだ、白い白衣の女性が寄ってくる。

・・・全く、何とか乗り切れたな

一安心する春時だった、が、まさかこの後ものすごく気まずいことになるとは、思ってもみなかった。

ナイト8「やっと信じてくれたぜ」(前書き)

わかってはいましたが文章がやはりまだまだ未熟でした。あと根本的な設定もミスっていました。今後はそんな事の無いようにがんばります。

ナイト8「やっと信じてくれたぜ」

「お名前は？」

「・・・水戸春時です」

「異国人なのよね？」

「・・・たぶん」

「多分って・・・まあ、記憶喪失だから仕方ないわよね」

先ほども、春時は女性教師から質問攻めを受けていた。

女性教師といっても、正直大人の騎士にしか見えないが、クロの担任らしい。

「それで？・・・自分の力についてわかっていることは？」

「・・・めっちゃ強いという事はわかりました」

そう言つて笑う春時、だが女性教師は怪しい目でこちらを見ている。

「・・・あの、まあ・・・俺が怪しい人間っていうのは仕方ありませんけど、クロが同級生に受けたあの行為についてはどう思うんですか？」

春時がそう言つと、女性教師は少しつまつた表情を見せた。

「そ・・・それは」

「うーん、あの行為がまさか生徒同士であるなんて、もしかして知らなかったのかなあ？」

「そ、それは、その」

「知らなかったらあなた方教師達の監督責任が問われますよねえ」

「も、もちろん、それは承知しています、ハイ」

「それにねえ、正直一般人と思われる人物に対して平然と攻撃をしてくる生徒にも問題はあるよねえ？」

「は、はい」

「もしもこの事が公おおやに知れたら、この学園の信用もガタ落ちだよねえ？」

「で・・・できれば、生徒達のためにこの事は伏せて頂けませんで

しょうか！」

「・・・ねえ、センセイ、その台詞、生徒のため？それとも、自分のため？」

春時が体制をグツと女性教師に近づけて言った。

女性教師は恥ずかしそうに少し赤くなる。

「・・・は、春時・・・くん、ち、近いわよ・・・」

「どうなの？センセイ？」

「あ、あの、だから・・・その」

「こら、何やってる変態」

誰かが部屋に入ってきた。

そして心の中で舌打ちした春時は振り返って驚愕した。

「・・・ど、どなたですか？」

春時がいやな汗をかきながら、ミーファと目を合わせないようにそう言った。

「あれえ？森の中で助けてくれた恩人をお忘れかなあ？」

「・・・恩人・・・ああ！恩人さんね！ハイハイ、恩人さんね・・・」

「先生、こいつ確かに怪しいけど悪いやつじゃないわよ、まあ変人だけど」

「うん、ボロクソに言っておきながらのフォローありがとうね」

「み、ミーファさんが言うなら、まあ、信用できる人なのね・・・い、いいわ、記憶喪失大変ね、でもがんばって・・・せ、先生でよかったらいつでも協力してあげ」

「はいはいはいはい、先生、もういいですから」

そう言つてミーファは女性教師を無理やり部屋から追い出した。

「・・・ったく、あんたもよく私の知り合いの知り合いになるわねえ」

「はい？」

春時は殴られた。

「私の親友シエナに連れてこられたと思ったら、今度はクロと同居していたなんて・・・なに？あんた私のストーカー？」

「おいおい、冗談なら自分の姿を鏡で見てから言いたまえ」

春時は顔を驚づかみにされたのでとりあえず謝った。

「でも・・・あなたがティナ達と戦っているのを見て、正直・・・あなたが異世界から来たっていう事、信じようと思うの」

「おせえ、今頃やつと信じてくれるのかよ」

「仕方ないじゃない！・・・そんな話、聞いた事ないんだから」

「・・・ま、それもそうか・・・で？シエナは？どちらかというと君よりあの天使に会いたいんだが？」

「・・・それ、微妙に傷つくから言わないでよ・・・私と会ったのがそんなに嫌？」

少し顔を曇らせたミーフアに、春時は少し驚いた。

「・・・もしかして、やきもブフォー！」

「はいはい、馬鹿言ってるよと殺すわよ？」

春時は頭から血を流しながら机にうつ伏せになった。

「・・・ま、冗談言すぎたって事で、謝るよ、悪かったな」

「そうそう、最初からそういう風に言えればいいのよ」

「・・・本当、ありがとな」

「・・・・・・はあ？」

「いや・・・なんだかんだ言っただけ、お前には頼っているからな、お礼ぐらいいだろ？」

そう言っただけで春時は、そしてちょっと難しい顔のミーフア。

「どうした？」

「・・・なんか、むしゃくしゃする！」

「は？なに？ストレスが溜まっているのかい？殴るなら壁殴ってね」

「うるさい！」

結局春時は殴られた。

「・・・で、やっぱシエナには会いたいんだが？」

「ああ・・・シエナは、ちょっと今ね・・・」

「・・・どうした？」

「・・・会いにくいんだって」

「・・・お前、シエナとケンカでもしたか？」

「あんたに会いにくいのよ！あんたに！」

「ええ！！俺まだシエナにはなにも！」

「なに？何かするつもりだった？」

「べ！別に！冗談で馬鹿にしようなんて全然思っ
てないから！！本
当！からかおうなんて思っ
てないから！」

「・・・よかった、こいつただの馬鹿だったわ

少し安心したミーファだった。

「でもなあ、俺に会いたくないなんて・・・意外とシエナも薄情だ
な、そんなに俺が異世界から来たって事を信じたくないのか？」

「あんたってつくづく着眼点のずれた男ね、それとも鈍感？」

「いや？勘は鋭いほうだ」

「じゃあ馬鹿なのね・・・あなたと別れる寸前まで、私もシエナも
春時の話、一切信じてなかったでしょ？・・・それであの子、春時
は本当に困っていたのに私たちはそれを見捨てたようなものだから、
会わせる顔がないって・・・それでこないのよ」

「・・・ブツ・・・それは・・・また、ククク、かわいい理由だなオ
イ」

そういいながらも笑うのを必死に我慢している春時。

「ほらね、こいつ全然気にしてない・・・でも、あの子は真剣に悩
んでいるからね」

「ま、そうならそれで、しかたねえ、俺がいつちよ迎えにいつてや
るか」

そう言っ
て春時は外へ出ようとドアを開けた。

『あ！』

なぜか他の生徒達がドアの前で聞き耳を立てていた。

「・・・おいおい、盗み聞きか？」

「あ！あの！・・・どうやったらあんなに強くなれるんですか！」

「あ！お、俺も！何か魔法とかも使えるんですか！？」

「そ、それに！聖語も桜語もわかるって本当ですか！」

「ティナのあの剣さばきを見切った所！すごかつこよかつたです！」

「スールの弾丸を素手ではじいて尚無傷ってすごい！サインください！」

なぜか有名人になる春時。

「うーん、サインならいくらでもしてあげるよ、それと俺実は魔法が使えないんだよ、しかも異世界から来たもんだからその所為で強くなっているから強くなる方法は知らないんだな」

「あんた何重要なこと喋っているのよおお！！！！」

ミーファの強烈なとび蹴りが頭に入る。

「馬鹿！一応秘密にしときなさいよ！てかファンがいるからついい気にならないでよね！わたしにだっているわよファンぐらい！」

足で春時を踏みつけるミーファ、そこへ、色紙を持った生徒が。

「すみません、ミーファ先輩！サインください！」

「いいわよ、貸して」

さらさらと書くミーファ。

「ありがとうございます！・・・春時様も、書いてくれますか？」

「オフコース！」

さらさらと書く春時。

「名前は？」

「え？・・・ジムです」

「オツケ、ジムちゃんへ」

「わあ！ありがとうございます！」

「なんでもうすでに有名人気取りなのよおお！！しかも様って私より上！！？」

「痛い！痛い！痛い！踏みつけるのはよせって！」

二人がそんなことをしていると、雪があきれた顔で近づいてきた。

「・・・あの、ちょっといいですか？」

「あ・・・一緒に戦っていたサムライさんね、何言ってるかわかんないけど」

「おう雪、大丈夫だったか」

「うん・・・それと春時・・・なんか、お父さんと学園長が呼んでるわ」

「ええ、俺今からシェナに会いに行くつもりなんだが？」

「なに？どうしたの？」

「学園長とシラサギ先生が呼んでいるだってさ」

「バカ！だったら早く行かないや！学園長を待たせたら大変よ！」

ミーファがそう言っただけに進む。

「へいへい・・・ああ、どうしたもんかな？」

「・・・私も付いて行ってあげる」

雪もそう言っただけに進んだ。

そして、春時も嫌々ながら付いて行ったのだった。

ナイト8「やっと信じてくれたぜ」(後書き)

感想評価、待っています。

ナイト9「こいつが学園長？」（前書き）

学園長のイメージは老人かな？あと知的だよな？んでもって頼れそうな大人・・・。

やっべ、今回の学園長今までに無い学園長になるかもしれないぜ！

ナイト9「こいつが学園長？」

学園長室

立派な木製のドアにはそう書かれたプレートが掲げられていた。

「うわゝ、さすが学園長室、豪華っぱいな」

「いいから入るわよ、時間かかるんだから」

え？なんで？と言う春時を無視して、ミーファはドアを開けた。

そして壁が出てきた。

「・・・あれ？ひっかけ？」

「ねえ春時、なんでドアを開けたのに向こうが壁なの？」

「雪・・・それはオレにもわからん」

二人がはてなマークを出しているのにもかかわらず、ミーファは平然と壁に手を当てた。

そしてよくわからない呪文のような言葉をつづる。

すると、壁が透けて、小さな部屋が現れた。

「おいおい・・・ここは魔法の世界か？」

「・・・これって騎士魔法ね、ただの魔法とは違う魔力の波長よ」

「・・・雪ちゃんわかるんだ、ていうか魔力の波長て何？」

「剣士たるもの、相手の波長ぐらい見極めれるものよ、春時も修行すればできるわよ」

「できるとかって問題か？」

「ごちゃごちゃ桜語で話し合わないでよ、なんだが私だけ仲間はずれみたいじゃない」

ミーファがそう言いつつ、ただ立ち尽くしていた。

「・・・で？先生方は？」

「待ってれば先生が来てくれるわよ」

その言葉通り、前方の壁にドアが浮き出てきた。そしてミーファは迷わずそのドアにむかって行く。それに続いて二人も歩いた。そして三人は順にドアをくぐった。

右側に大きな絵画がかけられている。その絵には銀色の甲冑をまとって、真っ赤なマントをひるがえす騎士の絵だ。

「・・・初めまして、春時くん」

春時は絵に見とれて前方にいた人物に気がつかなかった。

しかし、声がしたので春時はやっと気付く。

い、いよいよ学園の長とご対面か・・・きつとすごい人なんだろうな、威厳があって強そうで、いや、メガネをかけた優しそうな人か?・・・それとも以外に若い人だったりして・・・い、一体、どんな感じの人なんだろうか!

春時は緊張しながらも、前方にいる人物を見た。

大きな机、その右側に立っている侍は見覚えがある。初めてこの町に来て通訳したあの男だ。

そして机のイスに座っている骸骨・・・。

骸骨・・・。

「・・・さ、さすが魔法の国・・・何があってもおかしくないって事だな」

もはや遠くを見る目になっている春時、もちろん雪も開いた口が塞がらないほど驚いている。

「ちよつと変わっているけど、この方が我が学園の学園町、ウォンズ学園長よ」

「ちよつと変わってる?・・・確かに、思っていたのよりずっとスマートですね」

「え?スマートかい?うれしいな、そんなのはじめて言われたよ」
学園長はとりあえず喜んだ。

雪は言葉が通じないので何をしているのか理解不能なため泣き始めた。

春時は雪をなだめる。

「大丈夫だよ、逆に考えるんだ・・・ただの骨じゃないか」
「ただの骨がしゃべったり動いたりするわけ無いでしょ！」
雪のほう为正論だった。

「いやあ、驚かせてすまない。私がこの学園の責任者、ウォンズ学園長だ。またの名を『骨男爵』私を呼ぶ時は骨男爵でかまわないよ」
「学園長、その変なあだ名は諦めてくださいと何度言えば」

「シラサギ先生！骨男爵は私の夢なんですぞ！我々骨人間の間に最も栄光とされる呼び名であって英雄の『ボーンセスナ』も骨男爵の称号を持っていたとされているのですぞ！」

春時はとりあえず学園長とは気が合いそうな気がした。

「ねえねえ、なんでお父さんは聖語しゃべれるの？私と同じでしゃべれないはずなのに」

「魔法だよ、絶対そうだ、いや、それ以外に何があるのか？」

「大丈夫？かなりおかしいわよ春時？」

かなりって・・・ひどいな

「ああ、そういえば、そなたはシラサギ先生のお嬢様でしたね」

学園長が雪に向かってそう言った。

「・・・？」

しかし言葉が通じない。

「無礼な、返事くらいしてくれてもいいのに・・・どうせ骨人間だからバカにしてるんだ」

「学園長、言葉が聖語ですよ？」

ミーファが慣れた様子で学園長にそう注意した。

「ああ、そうだったな、これは失礼した。では、騎士魔法で」
学園長はそう言って指先を少し動かした。すると、指先から一粒の光が生まれる。

その光は黄色で、まるで蛍のようだった。その光は一瞬で雪の体に飛び込む。

「・・・え？・・・どうしたの？」

雪がしゃべると、

「すごいわ、こういった高等呪文をあつさりできる所はやはり学園長ね」

ミーファが感心している。という事は言葉が通じるようになったよ
うだ。

「あ・・・言葉が分かる」

雪もミーファの言葉が分かるようだ。

「さて、改めて・・・初めまして、春時くん」

「ど、どうも」

ようやくまともな話しに入れるようになった。

「君の事は少し調べさせてもらったよ、何せ特別な人だからね」

「も、もしかして！・・・オレが別の世界から来た事を・・・知っ
ているんですか？」

「・・・え？そうなの？」

学園長が骨のくせにリアルに驚いた顔をした。

「う、うそだよ。もちろん、知っている。本当だからね」

春時は学園長が頼りない事を悟った。

「とりあえず、君を特別な人間として認めた理由を話そうか。第一
の理由は・・・君にかけられている不滅呪文、『ラルゲナ』だよ。
その呪文の効力は『言葉を理解する呪文』」

「・・・????・・・要するに万能言語翻訳呪文ですか？」

「まあ、そういうことだね」

「ちよ、ちよつと、なんで古代上級魔法があんなにかかけられ
ているのよ？」

「コダイジヨウキウマハウ?・・・だれか説明を求む」

春時が目を点にして混乱していたのでミーファが早口に説明した。

「古代上級魔法は、この世界ができた頃である約3000年前にあ
った魔法の事よ。今の世界のように多くの人が使えたわけじゃない
から古代魔法は現代でも高等職者のマスターしか使えない難しいも

のなのよ、元々持っている魔力の強さやその魔力の微量調節と制御コントロール、更に人間ではない種族しか古代魔法は使えないのよ」
「要するにめっちゃすげー魔法って事なんだな」

春時は軽く流した。

「それで？なんでオレにそんな大層な魔法がかかっている事がわかったの？」

「簡単だよ、君は聖語も桜語もしゃべれると思われているが、私には何語にでも聞こえるからだよ」

「・・・つまり、聖語にも桜語にも聞こえるんですか？」

「もつと言えば竜語、妖語、骨語、もつと他の言葉としても理解できるのだよ。どう？すごくない？」

「確かに・・・そんな魔法がかかっている俺がすごいですね」

春時はわざとそう言った。案の定学園長は誰にでもわかるぐらいに落ち込んだ顔をした。

「・・・で？オレが只者ではない事がわかった理由はそれだけですか？」

「あ、ああ、うん、いや・・・うん、他にもあるよ」

大分投げやりになった学園長だが話は進める。

「丁度一昨日の夜だ・・・世界のエレルギーバランスがちよ～つとぶれたのだよ」

学園長は骨の関節が良く見える骨の指で『ちよつと』というジェスチャーをした。

「ぶれた？・・・つまりどういうことです？」

「学園長！それ本当ですか！？」

ミーファがいきなり金切り声を上げてつつかかってきた。

「うるさいなあ・・・ぶれただけなら数値は元に戻っているんだろ？」

「バカ！世界のエネルギーは常に変化しているのよ！人が一人死ねば減るし！逆に生命が誕生すれば増える！もちろん人だけじゃないわ。命あるもの全てよ。草木や動物、虫だってエネルギーとして存

在するのよ．．．でも、その変化を感じる事は不可能に近いのよ。
どんなマスターでも、何事も無い日常での数値の変化はわからない
わ．．．でも、一昨日の夜は、数値が変わったのがわかったのよ
？．．．これがどういう事か．．．わかる？」

「いや、わっかんね」

「この単細胞が．．．脳ミソ入ってないんじゃないの？」

ミーファが春時の首を絞めながら冷酷に怒っていた。

「まあまあ、春時くんはこの世界の人間ではないのだ、すぐに理解
できなくても仕方が無い」

学園長がミーファを何とか止めたので春時はなんとか生き延びた。

「簡単に説明をすると、エネルギーは要するに生命の力の事だ。よ
つて、この世界に今存在している命あるもの全てがエネルギーなの
だ。だが、例えば．．．植物の種を一つだけ蒔いて、その種から芽
が出たとする．．．それだけでエネルギーは増えているはずなの
だが．．．そのエネルギーの変化はあまりにも微量なため、学園長
をしているマスターの私ですらわからない、だが．．．そんな私に
も、一昨日のエネルギーのぶれは確かに感じた．．．エネルギーが
確かに増えてから減ったのだ．．．つまり．．．その数秒の間に、
軽く見積もっても、小さな国一つが出現して消滅した事になるのだ
よ」

学園長がそういうと、部屋が静かになった。

ミーファも雪も、そして春時も、その信じられない事実にも固まっ
ていた。

「．．．まあ、それに関係していると、私は踏んでいるという事だ」
「．．．国一つが現れて消えるのと、オレが異世界から来た事．．．
それが繋がっているかもしれないのか」

「あくまでも．．．私の推測だが．．．一度増えてから消えたとい
うこの変化は．．．君の言う異世界から何者かがやって来て．．．
消えてしまった、もしくは．．．隠れた事になる」

「隠れる？．．．生命の力が．．．エネルギーなんじゃ？」

「……悪魔になれば、生命の力を気取られないようになるのだよ」

学園長は表情の無い骸骨の顔で、ただそれだけを言った。

「まあ……そうなると一波乱来そうだな〜って感じはするけど、多分君は100%それに巻き込まれた不幸な少年だと思うから、まあ、ドンマイみたいな？」

「え？そ、そんな軽く見ていいんですか？」

春時はまだ青い顔から変わっていないがしつかりつつこんだ。

「……悪魔との戦いは今に始まった事ではない、何千年という時を我々は戦ってきた。それこそ、敵の数は無限とでも言うくらいだったよ……。だから、今更国一つ分の悪魔が現れても、こちらとしては面倒ごとが増えただけで失ったものは無い……。だが、君は違うだろう？……。家族も、友も、自分の居場所さえも……。こことは違う世界にあるのだろ？」

「……それは」

春時はようやく、自分が何を失ってしまったのか、理解した。

昨日までは一人かもしれないという孤独感があった。だが……。今感じているものは、寂しさだった。

「……オレ……。帰れると思いますか？」

「……。最も長く続いている種族である竜族の文献を研究している私から言わせてもらうと……。今までに、異世界からの来訪者はいない……。すまないが、君は帰る事ができないと思う」
「……。そうですか」

学園長は明日またきてくれと言った。

そして一先ず、春時とミーファと雪は、雪の父でもあり先生である
シラサギ先生に連れ添ってもらい、学園長室を出たのだった。

ナイト9「こいつが学園長？」（後書き）

感想評価まってまあああす！ by 作者

おい、シリアスモードはどうした？ by 春時

ナイト10「オレの大切なものはなあ」

学園長室を出て、春時は唐突に言葉を発した。

「・・・悪い、一人になっていいか？」

あっさりとした物言いだ、顔を見せてくれない春時の後姿を見て、二人は何も言えなかった。

「・・・静かな場所なら、ここの廊下を左に進んで、三番目に見える階段を上がって行くと屋内菜園につながっているから・・・そこが静かよ」

ミーファは静かにそう言つて、右に廊下を進んで行つた。

「・・・はる・・・」

雪は小さな声で春時を呼ぼうとしたが、春時が黙って左に進んで行ったので、言いそびれてしまった。そして、雪も渋々ミーファの後を追った。

春時は無言でミーファの言われたとおりの道を進んでいた。階段への道のりはたいしてなかったものの、階段の段差の数は多かった。一段一段を確かに踏みしめて、春時は大きな扉の前まで来た。そして、数秒のためらいの後、勢い良く扉を開けた。

最初に目に飛び込んで来た映像は、少女の後姿だった。その後姿は、確か見覚えのあるものだった。

「・・・シエナ」

「え？」

振り返った少女は、やはり、シエナだった。

黒髪は相変わらず艶やかで、少女の瞳は透き通った黒。黒が目立つ色彩なのに、彼女自身からは光の色がもれている気がした。

春時はじつとシエナを見つめていた。

「あ、あ！その！な、なんでここに？つじやなくて！すみませんでした！」

シエナが何か口走っているが、春時には聞こえていないようだ。

「その！……命の恩人なのに、その人を信じる事もしないで、それなのに……平然と、帰る場所があなたにもあるなんて……無神経にも言っちゃって……ほ、本当にごめんなさい！！」

春時は慌しく動くシエナを見て、数秒後にようやく我に返った。

「……見惚れてた……のかな？」

「わ、私最低ですよ。いや、ドジとかは良く踏むんですけど、人を傷つける事までするなんて、弁解の余地もありません！どうぞ私を殴るなり蹴るなりしてください！」

「……いや、とりあえず落ち着こうか」

春時は滑稽な動きをするシエナを見て、笑いそうになるのを堪えた。

「……ここ、よく来るの？」

「え？……いえ、たまにしか来ません……」

「ふーん……つまり、落ち込んでいる時、良く来るわけか」

「うっ……何でわかるんですか？」

シエナが気まずそうな表情で言っていると、春時があっさりと返した。

「俺も今……落ち込んでいるからだよ」

天井と前方がガラス張りの屋内菜園。今日は太陽が強いのか日差しは暑かった。

名前は知らないが大きな葉をつけた植物やらきれいな花を咲かせている植物やら、見たことのあるものも無いものも混ざってはいるが、

自分の元いた世界と特に変わらないのだな、と、春時は思いながら、結構広い菜園を歩き始める。そして、同時に話を始めた。

「俺・・・帰れないんだってさ・・・元の世界に」

「・・・そ、そうなんですか？」

「そもそもここへどうやって来たのかすらはつきりしていないもんな、帰れるわけ無いか」

「・・・・・・寂しい・・・ですか？」

シエナが緊張しながら、後ろから聞いてくる。

「・・・だろうな」

春時は素直に答えた。

「・・・向こうにはさ、弟もいたし、父さんも母さんも、友達だった・・・あと・・・」

「・・・春時くん・・・」

「・・・この世界には・・・絶対にいない・・・そんな奴らを・・・いつぱい向こうに残してきたんだよ」

春時は絶対に振り返らなかった。シエナはそんな様子の春時を見、見ることしかできなかった。

「・・・は、はる・・・ときくん・・・」

春時の心情に同化され、シエナは涙が出てきた。

「・・・俺さあ・・・一番手放しちゃあいけないもん・・・向こうにおいてきしまった」

「・・・もう、いいよ・・・」

「・・・そいつとはさ、毎日顔あわせてよ・・・あわない日なんてなかった」

「・・・もう・・・いいから」

「もう・・・何年も一緒にいるからよ・・・俺にとっては・・・大切な存在なんだよ」

「・・・春時くん・・・」

「あいつがいなきゃ！オレはどうにかなっちまいそうなんだよ！！」

「私が！・・・私がその代わりになるから！！」

シエナが、力一杯そう叫んだ。春時は驚いて振り返る。

そしたら・・・涙をボロボロ流したシエナが立っていた。

「私が！春時くんの大切な存在になるから！！春時君の寂しさを埋めてあげるから！！」

「・・・いや・・・シエナじゃあ・・・代わりはちょっと」

「確かに！・・・すぐに・・・春時くんの大切なものには成れないと思うけど！がんばるから！絶対！絶対に成れるようにがんばるから！！」

「・・・いや・・・その・・・あの」

春時は真剣な表情のシエナに対して・・・物凄い罪悪感を感じていた。

「・・・今更・・・それはパソコンですなんて・・・言えないじゃねえかよ・・・」

「・・・うん・・・まあ・・・ありがとう」

「それで！春時くんの大切な人ってどんな人なんですか！」

い、いや・・・人じゃないんですけど

「男ですか！女ですか！」

もはや語尾が強い調子に慣れてしまったシエナ、そして春時は更に慌てる。

「・・・お、落ち着いて聞いてくれシエナ」

「はい！男だったとしても私ががんばります！！」

「・・・この世界でも・・・オレは元の世界と同じものを手に入れたんだよ」

「え！？それはなんですか！」

春時は一息ついてから、ゆっくりと話した。

「・・・父さんも、母さんも・・・妹も・・・そして大切な親友や友達・・・シエナ、お前だって、友達なんだぞ？・・・お前はもう、俺にとっては大切な存在なんだからな」

春時がそう言うと、シエナはやっと、涙を止めたようだ。

「・・・う、うん・・・えっと・・・わかりました」

「よろしい、じゃ・・・みんなの所に帰るか」

「う・・・うん・・・あ！でも！」

いきなり声を上げるシエナ、春時は怪訝な顔をして訊いた。
「どうした？」

「春時君の一番大切な人は？毎日会っていたんでしょ？」

「・・・なあ・・・一応訊くけど・・・」

「うんうん」

興味心身で聞くシエナ。そして、春時は口を開いた。

「・・・パソコンって・・・この世界にある？」

「・・・は？」

「な、ないよな・・・あるわけないよな！うん！もういい、気にしないでくれ」

「ありますよ？」

「マジで！！ちょ！本当！？嘘じゃない！？嘘じゃないよね！！！」

「・・・も、もしかして春時君の一番大切なものって・・・パソコン？」

「・・・まあ・・・そうかな」

春時がそう言うと、シエナがなぜか下を向く。

そして、なにやらブツブツと唱えていた。

「・・・えっと・・・シエナちゃん？」

「・・・私の」 「はい？」

「私の涙を返してよ！！！！ばかああああ！！！！！！！！！！」

なぜかシェナの手には杖らしき棒があつて、そこから電気のようなバチバチとしたスパークがあつて、それが大量に放出されて、春時を菜園ごと包み込んだのだった。

ナイト10「オレの大切なものはなあ」(後書き)

シリアスぶつ壊れ。うん、これが本性。

そしてまさかの魔女娘。初めて書きました。

何はともあれ感想お待ちします!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8075f/>

ナイトで行こう！

2010年10月9日23時07分発行